

生物農薬

誌名	日本農薬学会誌
ISSN	03851559
著者	松中, 昭一
巻/号	1巻特別号
掲載ページ	p. 373-373
発行年月	1976年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



生 物 農 薬

松 中 昭 一

農業技術研究所*

雑草防除の分野における生物農薬について、一言ふれておきたい。雑草の生物的防除にかんしては、主として帰化雑草に対する天敵昆虫（雑草の母国から輸入されたもの）の利用を中心にかなりの発展をみている。わが国では、植物に害を与える昆虫等の輸入が法律的に禁じられているので、いきおい土着の天敵を利用する方向をとらざるをえない。筆者は、1972年アメリカ、1974年ヨーロッパを調査しての結論として、わが国では、まず第1に水田移植栽培におけるカブトエビの利用をとりあげるべきであると考えた。

カブトエビは、水田の入水・しろかきとともに発生を開始し、速やかに生長する。多数の脚状の器官で水田土壌をかきまわし、発生する雑草を主として機械的障害を与えることによって防除する。だいたい20~30匹/m²程度発生すれば除草に有効と考えられているが100匹/m²程度にまで発生することもある。その卵が発生したあと約2週間成虫となり産卵をはじめ、環境さえよければ成虫は2カ月近くも生存する。その活動期間は水田除草必要期間と一致する。卵は乾燥・低温等にも耐え、土中

で越冬し、翌年、入水・しろかきによって発生をくりかえす。したがって、現在発生する水田ではこれを保護するとともに、一方では別の水田等で生産された卵を生物農薬的に取り扱い、未発生田に投入・利用することが考えられる。現在のところ、この卵の大量生産法の確立と人体への影響（無影響と考えられるが）の事前評価が次の検討目標といえよう。

なお、雑草の生物的防除研究分野では、Commonwealth Institute of Biological Control, Delémont, SwitzerlandのDr. Schröderの世話でニュースレターが1年に2回ずつ発行され、相互の情報交換が行われている。また、第4回生物的雑草防除国際シンポジウムがこの8月30日~9月2日の間にフロリダのゲーンズビルで開催された。

引 用 文 献

- 秋田正人：生物科学 24 (4), 169 (1973)
 片山寛之：農業技術 28 (4), 161, 28 (5), 208 (1973)
 高橋史樹：生物環境調節 13, 29 (1975)
 松中昭一：今月の農薬 20 (11), 64 (1976)